様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３７３

研究課題名（和文）戦間期の「多元的宇宙」―エルンスト・ブロッホのプロジェクト「遺産」と「異化」

研究課題名（英文）Ernst Bloch's vision of the "Multiversum" in the interwar period

研究代表者
吉田　治代（Yoshida, Haruyo）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：７０４６００１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、戦間期のエルンスト・ブロッホの多元主義的思想を〈遺産プロジェクト〉と〈異化プロジェクト〉という観点から考察するものである。本研究期間内は、〈遺産プロジェクト〉に焦点を絞り、以下を明らかにした。(1)ドイツの反民主主義、軍国主義という、第一次世界大戦から顕在化する危機に抗してブロッホが生み出したのが、ドイツの民主的かつ民族的な遺産を相続するという「愛国的」プロジェクトであり、それがナチズムへの批判にもつながる。(2)「ドイツ民族主義」思想が文化多元思想につながる限りにおいてそれを受け継いだランダウアーらユダヤ系社会主義者の実践が、ブロッホのプロジェクトのモデルとなっている。

研究成果の概要（英文）：This study explores Ernst Bloch's pluralistic thought by examining his <heritage project> and <defamiliarization project> during the interwar period. Within this research period, it focused on the <heritage project>, and it clarified following two points. (1) His idea of heritage is not "Marxist" but "patriotic", and its origin is in the time of World War I, where Bloch faced the crisis of anti-democratic and militaristic Germany. Fighting against his country, Bloch also tried to reactivate democratic and ethnic/cultural heritage of Germany.
(2) In developing this project, Bloch was influenced by the Jewish socialist Gustav Landauer who inherited the thought of "German nationalism" as long as this nationalism would contribute cultural pluralism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ユダヤ系ドイツ思想　ナショナリズム　文化遺産・記憶論

１．研究開始当初の背景

本研究代表者の研究の全体構想は、1910～30 年代のエルンスト・ブロッホ（1885-1977）に現れる「多元的宇宙」（Multiversum）のヴィジョンを解明しようとするものである。それにより、これまでほぼ「マルクス主義哲学者」としてのみ受容され、現在では忘れ去られつつあるブロッホについて、同時代の日本を含む非西洋の思想とも比較・対照しつつ、ポストコロニアリズムの観点も踏まえながら、ブロッホ独自の多元主義的思想を再評価することを目指している。

ブロッホの多元主義への関心は、スイスの研究者 B. Dietschy において先駆的にみられるものの、彼においても、1910 年代の初期テクストは重要視されていない。2009 年の博士論文をもとに 2011 年に刊行した単著『ブロッホと「多元的宇宙」 ── グローバル化と戦争の世紀へのヴィジョン』では、1917 年のロシア革命によってマルクス主義者になったという単純化されたブロッホ解釈に対し、日本のみならずドイツにおいても閑却されている初期作品の厳密な文献学的調査を通して以下を明らかにした。(1) ブロッホの思想の出発点は、第一次世界大戦、とくに西洋に敵対した母国ドイツに対する批判にある。(2) スイスに亡命し反ドイツの論陣を張ったブロッホは、西洋近代の民主主義理念の普遍性を承認し、その理念で結びつく一つの世界を希求する。しかし同時に、西洋近代の資本主義ならびに植民地帝国主義の問題を自覚し、ドイツに広まっていた近代批判を文化の独自性の擁護として読み替え、その重要性を認識していた。(3) 第一次世界大戦を契機として生まれた「多元的宇宙」のヴィジョンは、自由と平等という普遍的理念で結ばれつつ、さまざまな「非同時代的」文化が共存する世界を志向するものである。本研究代表者は、この研究の一端を、「アジア・ゲルマニスト会議」（2008 年）、「ドイツ文学・語学国際学会」（2010 年）などの国際会議でも発表してきた。

1914 年から 1923 年ごろまでを扱った博士論文の成果をもとに、本研究は、多元主義思想という観点からのブロッホの読み直しを、さらに 1930 年代までを視野に収めて推し進めるものである。ヴァイマル時代のブロッホは、台頭するナチズムに抗するため、友人ルカーチの影響を受けながら、マルクス主義への信念を強めていく。しかし、すでに第一次世界大戦時より現れた「非同時代性」や「多元的宇宙」という概念は、引き続き戦間期のテクストにも散見される。ドイツを批判するとともに、その豊かな思想文化を救出するという、第一次世界大戦期の若きブロッホのなかで育まれた考え方が、左右両極が過激化する戦間期にどのように維持され、発展させられ、また変容を蒙っていくのか、という問いが、本研究の出発点となっている。

２．研究の目的

本研究の目的は、戦間期におけるブロッホの著作を、当時のオリジナル・テクストに立ち戻って分析し、その多元主義的思想を解明しようとするものである。従来、この時期のブロッホ思想は、「マルクス主義哲学者によるナチズム批判」として集約されてきた。従来のブロッホ研究にみられる、「ブロッホ＝マルクス主義者」という一面化は、ブロッホ自身にも責任がある。ブロッホ全集は、晩年の彼自身の手によって編まれたものであるが、そこで彼は、1917 年来一貫してマルクス主義者として自己形成してきたという物語をつくりあげ、それに合致しない初期のテクストは、改編されるか排除されてきたからである。ブロッホ研究および受容の問題点は、この全集に依拠してきたことにある。近年ではオリジナル・テクストの一部再刊が進んではいるが、「歴史的・批判的」な全集版はいまだ刊行されていない。

こうした現状を踏まえ、本研究は、博士論文以降進めている、厳密な文献学的調査によるテクスト分析をヴァイマル期にまで推し進める。ナチスドイツから亡命する直前までのブロッホの仕事を、〈遺産プロジェクト〉と〈異化プロジェクト〉と捉えてその具体像を明らかにし、ファシズムにも「全体主義的」マルクス主義にも回収されない「多元的宇宙」のヴィジョンの追求として読み直す。また当時の知識人界における彼独自の位置を解明し、さらに、「植民地主義以降」の、文化的多元主義が叫ばれる今日の視点からその意義を考察する。

もとより、研究の全体構想は、3 年間という期間で計画されていた本研究の枠にとどまるものではない。以下に詳述するように、本研究では〈遺産プロジェクト〉に限定するなど、当初の計画も一部変更した。

３．研究の方法

(1) ブロッホの基礎的文献の収集と分析

上記のとおり、ブロッホについてはいまだ「歴史的・批判的」な全集が存在しない。〈遺産プロジェクト〉の中心となるのは『この時代の遺産』（1934 年）であるが、1964 年の第 2 版には、第 1 版には収められなかった多くのエッセイが所収されていることからも分かるとおり、1934 年の書物だけで完結するものではない。〈遺産プロジェクト〉の全貌を解明するためにも、戦間期に単行本として出版された原本だけでなく、雑誌や新聞に掲載された評論やエッセイのオリジナル資料にもあたる必要がある。そのために、ドイツのルートヴィヒスハーフェンにある「ブロッホ資料館」を訪問し、一次資料および最新の研究文献を収集する。さらに、既存の全集のみに依拠するのではない「批判的」研究をすすめている各国の研究者（スイスの Dietschy、

イギリスの C. Ujima、ドイツの R.Becker および W.Wild）とも可能な限り直接コンタクトをとりつつ、最新の研究動向を調査する。

(2) 戦間期ドイツ知識人たちとの関連の調査

第一次世界大戦の敗北をうけ、ヴァイマル期には、左右両陣営の思想が過激化していく。ブロッホの批評においては、様々な同時代人の思想が批判的・肯定的に言及され、それを通じて、彼は、競合する思想闘争のなかで独自の立場を模索していく。したがって次のような周辺の知識人たちの立場を解明し、ブロッホとの関連を調査することが必要となる。①正統マルクス主義者としてのルカーチ。一般的には、ブロッホはルカーチと同陣営とみられるが、表現主義論争にも明らかなとおり、両者間には相違も多くある。本研究は、ブロッホと保守派との親縁性という観点から、両者の差異について考察する。②「保守革命」に連なる知識人（メラー・ファン・デン・ブルック、シュペングラーなど）。ルカーチとは違い、保守思想家の「非合理主義」にも一定の理解を示すブロッホのアンビバレントな思考の根拠を探る。③上記のどちらにも含まれない「左派アウトサイダー」としてのベンヤミンとクラカウアー。正統派マルクス主義の立場にはおさまりきれない二人の年少の友人から、ブロッホは大きな影響を受けていると考えられる。二人の著作を読み込み、また、彼らとブロッホのあいだで交わされた書簡および日記などから、彼らの交流の実像を再構成する。④第一次大戦以前からの、隠された参照枠としてのグスタフ・ランダウアー。博士論文において、ランダウアーとの関連について言及したが、部分的なものにとどまった。バイエルン革命で落命したランダウアーは「ヴァイマル知識人」ではないが、上記のようなブロッホの独特のポジションには、ランダウアーの影響があると考えられるため、さらなる調査を必要とする。

(3)ブロッホの「遺産」概念の分析

『この時代の遺産』にみられる「遺産」概念は、正統マルクス主義によっては顧みられなかった後期資本主義の文化を来たるべき社会主義世界に受け継ぐべきだとする、マルクス主義的な議論の枠内にあるように思われる。とは言え、ファシズムに取り込まれたドイツ文化の奪還を目指す主張には、ブロッホ独自の愛国主義が織り込まれている。自ら「愛国者」を名乗った第一次世界大戦時からナチス前夜に至るまでの愛国主義の連続性という仮説に基づき、「ドイツの遺産」というナショナルな観点から、第一次大戦以来のブロッホの「遺産」概念を再検証する。その際、「文化遺産」をめぐる今日の文化理論についても検討し、新たなブロッホ読解のための理論的構築を目指す。

４．研究成果

(1)ルートヴィヒスハーフェンの「ブロッホ資料館」およびベルリン国立図書館にて、ヴァイマル期の一次資料、最新の二次文献の収集と読解を行った。また、ブロッホ最晩年の弟子であり、「非同時代性」や「多元的宇宙」の概念についての先駆的な研究で知られる Dietschy や、現在「ブロッホ協会」にて、第一次世界大戦時のブロッホ研究を推進している Wild と交流を深めた。「ブロッホ協会」からは、日本におけるブロッホ受容について報告するよう依頼をうけ、論文「エルンスト・ブロッホと日本」を執筆した。本研究テーマとは直接関係しないが、海外のブロッホ研究者との交流という観点からは、大きな成果と言える。この論文は、2014 年度に刊行される『ブロッホ年鑑』に掲載予定である。（論文①）また、第一次世界大戦 100 周年を記念して、ドイツのブロッホ研究の分野においても様々なプロジェクトが企画されているが、現在、そうしたプロジェクトへの参加も調整中である。

(2)本研究の初年度に博士論文が刊行されたこともあり、一年目には、博士論文で十分に論じきれなかった点を補いつつ、その成果を口頭発表する機会を与えられた。「ブロッホ、アメリカ、多元的宇宙」（学会発表③）では、ドイツ（ヨーロッパ）人によるアメリカ論の伝統のなかにブロッホを位置づけ、彼の多元主義思想にアメリカのプラグマティズムの影響が強くみられることを明らかにした。「ブロッホとアメリカ」はブロッホ研究では殆ど取り上げられることのないテーマであるが、今後さらに取り組むべき課題であるとの認識を得た。また、「『敗北の思考』のなかの『愛国』」（学会発表④）では、戦争の敗北とネイションの再生という文脈において生まれたブロッホの愛国主義を検討し、彼における「ネイション」概念の重要性を指摘した。

(3) ブロッホにおいて「愛国」という問題が、第一次大戦時からヴァイマル期まで継続して現れることを示し、博士論文から本研究への橋渡しとなったのが、「『この時代の遺産』を救出する」」（学会発表②）である。「遺産」概念は、ブロッホにおいては 1934 年にようやく鍵概念として、しかしマルクス主義的議論のなかで提示される。しかし 1910 年代からのテクストを「遺産」という観点から再検討した結果、ブロッホの「遺産相続」とは、愛国の立場から行われる、ドイツの「ナショナルな」精神文化、すなわち、民主的伝統および文化的民族的伝統の受け継ぎであることを明らかにした。

(4)ブロッホ周辺のヴァイマル知識人については、多くが予備的な調査にとどまり、成果を発表するに至っていないものが多いが、以下のような認識を得た。①ルカーチとブロッ

ホの相違は、「表現主義論争」をめぐる対立として理解されてきた。しかしそれにとどまらず、両者のドイツ論（ネイション論）において大きな対立が認められる。②ブロッホと保守思想との親縁性は、西洋文明の一元化に対し「ドイツ文化」を防御しようとした第一次世界大戦時のドイツ知識人の思想に多くを負っている。とは言え、多元主義的な方向で思考するブロッホと、排外主義的攻撃的ナショナリズムを志向する後者との道は分かれる。③ヴァイマル期の「左翼アウトサイダー」としてブロッホが、ベンヤミンやクラカウアーの「アナーキスト」的態度、「脇にずれたもの」、「細部のもの」への視座に共感を寄せていることが明らかとなった。ただ、第一次世界大戦の思想的課題を自覚的に引き受けているかという点で、戦争体験がより希薄な年少の友人たちとブロッホの間で温度差があるように思われる。④むしろ上記のようなブロッホの思考法に決定的な影響を与えたのはランダウアーであろう。このランダウアーについて、第一次世界大戦前夜の危機的状況におけるドイツ文化の想起と遺産相続の取り組みを検証し、これを発表した。(学会発表①および図書①)

(5)現代における「文化遺産」論の考察、さらにブロッホの〈異化プロジェクト〉および非西洋の思想との比較は、予備的作業にとどまった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① Haruyo Yoshida: Ernst Bloch und Japan. In: Bloch-Jahrbuch 2013. 2014.(印刷中）査読有
② Haruyo Yoshida: Nüchterne Distanzierung? Japan und Europa bei Karl Löwith. In: contraste. Jahrbuch für japanisch-deutsche Kulturkomaratistik. Bd.1. 2014.（印刷中）査読有
③ Haruyo Yoshida: Solidarität mit Amerika, Kampf für das “Multiversum”. Ernst Bloch und der Erste Weltkrieg. In: Trans-kulturalität – Identitäten in neuem Licht. Hrsg. von Ryozo Maeda. München 2012, pp.595-600. 査読有

〔学会発表〕（計　4 件）

①吉田治代：1913 年の「ネイション」論 ── グスタフ・ランダウアーの視座（日本独文学会北陸支部研究発表会、2013 年 11 月 9 日、富山パレ・プラン高志会館）
②吉田治代：「この時代の遺産」を救出する ── 愛国のブリコルールとしてのエルンスト・ブロッホ（立教・チュービンゲン国際シンポジウム「宗教的なるものと文化保守主義」2012 年 11 月 1 日、立教大学）
③吉田治代：ブロッホ、アメリカ、多元的宇宙（新潟哲学思想セミナー、2012 年 2 月 23 日、新潟大学）
④吉田治代：「敗北の思考」のなかの「愛国」── 第一次世界大戦期におけるエルンスト・ブロッホの批評（ドイツ民族主義宗教運動研究会、2011 年 7 月 23 日、立教大学）

〔図書〕（計　1 件）

①吉田治代、大田浩司ほか（共編著）『高橋輝暁先生退職記念論文集』2014 年刊行予定

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　治代　（YOSHIDA HARUYO）
新潟大学、人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：70460011

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：